アベリスツイス交流事業　報告書

峰山高校２年　内田大雅

・目的

文化の違いを肌で感じ、日本の文化を伝える。
フランクエバンズさんの思いを大切にし、
与謝野町の代表として研修に参加するということを忘れず、
与謝野町とアベリスツイスとの交流がこれからも続き平和で有り続けれるよう努力する。

・はじめに

僕には好きな英語を生かして海外に行ってみたいという夢がありました。
そこでこの派遣事業の募集を知り、これしかないと思い応募し、参加できることになりました。
アベリスツイスと与謝野町の交流があるというのは知っていましたが、その内容やきっかけは事前研修が始まるまでは何も知りませんでした。
昔フランクエヴァンズさんという人がいて、ニッケル鉱山で強制労働させられていた過去があり、それがきっかけでこの交流が始まったことを知りました。
そのような悲惨な出来事があり二度と戦争が起こらないよう、両国の平和のためにこの交流事業が始まり、２０年目の交流として僕たちがアベリスツイスの地に行きました。

アベリスツイス(Aberystwyth)

・国:ウェールズ

・言語：英語・ウェールズ語

・人口：約 16,000 人

・日本との時差：9 時間[サマータイム 8h]

言語

事前研修をするまでは、イギリスだから英語だけだろうと思っていましたが、
アベリスツイスはウェールズにあるので当然ウェールズ語もありました。
英語ではありえないような綴りがあったり発音がとても難かしいです
おはよう→bore da(ボレダ)
おやすみ→Nos da（ノスダ）
ありがとう→Diolch（ディオークッ）
元気？→Sut mae?（シュマーイ）

は覚えました。
一緒に行った派遣員のみんなとウェールズ語であいさつしたり、ホストファミリーや友達に教えてもらったりして難しかったけどとても楽しかったです。
ペンウェディングスクールに行って、全校生徒の前で挨拶をしたときに、Bore da と言っただけで拍手が起きて嬉しかったです。

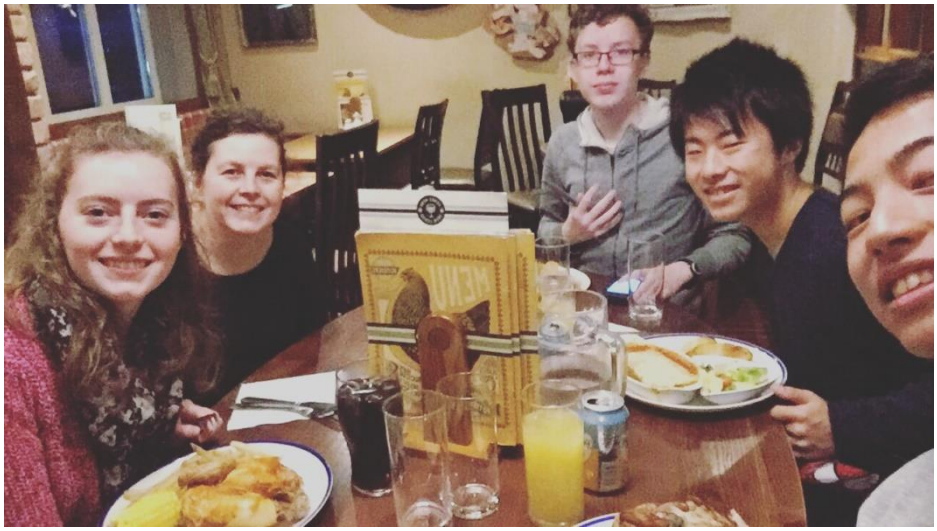
ホストファミリー

今回はアベリスツイスの生徒のほうが与謝野町から来た生徒よりも人数が多く、
みんな二人ずつホストステューデントがいました。

・一人目

Sion(ショーン)

ショーンとは風が強すぎて飛ばされてきた砂でできた小さい砂丘がある海岸に行ったり、ショーンのおじいちゃんの経営している農場に行ったりしました。
動物とゲームが大好きでとても優しい１６歳です。



左からショーンのお姉さんのFfion 、お母さんのRhian、Sionです。
この時お父さんはロンドンに出張に行っていて写真を撮ることができませんでした（お父さんはAberystwyth大学の先生をしています）
お姉さんのFfionはアベリスツイスから離れたところにあるBangorというところに住んでいて、そこの大学に通っています。

・二人目

Daniel（ダニエル）

ダニエルはいろいろなところに連れて行ってくれたり、なんでも聞いたら分かりやすい英語で教えてくれたり、たくさん質問してくれたりと、とても優しくて明るい性格の持ち主です。
ダニエルの家には一度も行く機会がなかったので、ダニエルの家族の写真がありません。
ホストステューデント同士が仲がよく、ダニエルと仲のいいレベッカという女の子の家でダニエル達と過ごすことが多かったです。

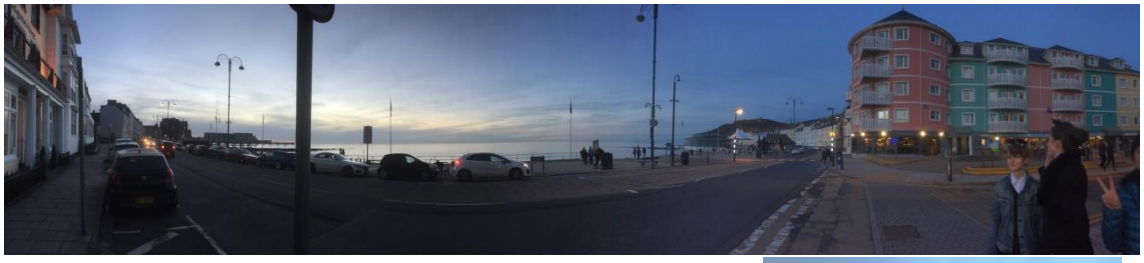
せっかくなのでレベッカも紹介します

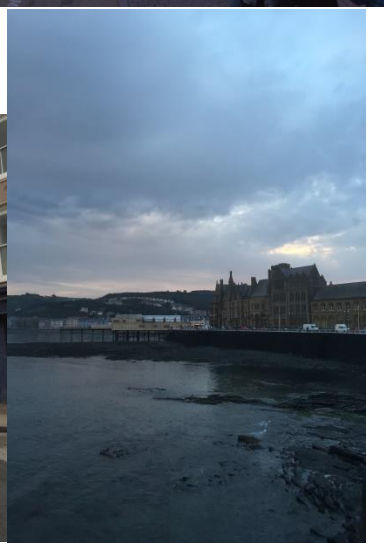
Rebecca（レベッカ）

ダニエルと仲がよく、一緒に行動したことが多かったので紹介します。
レベッカはとても自由で優しく明るい人でした。
音楽やファッションの好みが僕と似ていて、たくさんかっこいい音楽を教えてくれたり服のお店に連れていってくれたりしました。

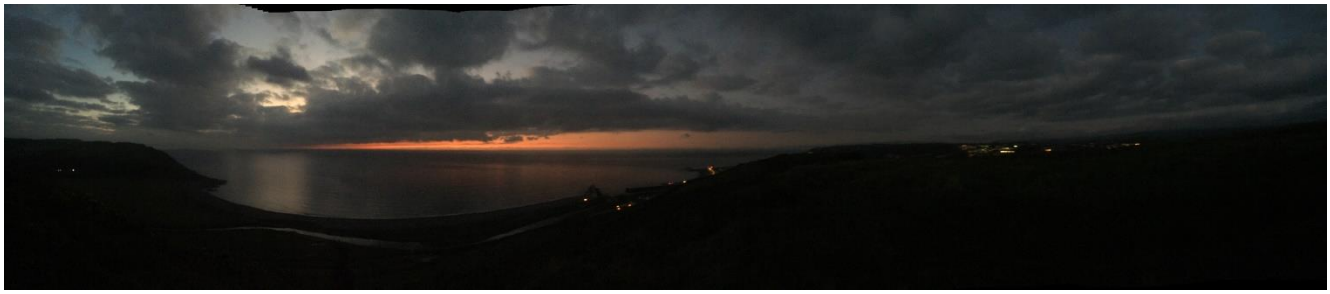
町並み

↓隣町の Aberaeron





海沿いにあり、街並みはとても綺麗で、一言で表すと THE ヨーロッパといった感じ。
ウェールズの中でもアベリスツイスや隣町のアベレイロンなどは特にカラフルらしく可愛らしい町並みでした。
夕焼けが本当に綺麗でした。
日本に帰る前日に丘から眺めた夕焼けは、今までで見た景色の中で一番美しく、息を呑むほどの美しさでした。



食べ物

イギリスの料理はあまり美味しくないと聞いていましたが、実際に食べてみると全部僕の口に合って美味しかったです。
ほとんどナイフとフォークで食べ、お箸を使わない文化を体験できました。

芋は毎日食べました。日本に比べて野菜があまりなく、特にキャベツやレタスなどの葉菜類が少なめでほとんど見ることがない。
基本的に味付けが濃くて、量も多いので全部食べきるのは大変でしたが美味しかったので食べきれました。
ウェールズの人たちは、食べきれなかったら遠慮なく残します。それを作った人も捨てた人も食事を残すこと気にしません。
日本だと、食べ物を残すのはあまり良くないことだと思われるので、ここでも文化の違いを感じました。

学校

Penwedding(ペンウェディング)
Penglais(ペングライス)
Primary school　　の３つの学校に訪れました。

ペンウェディングとペングライスはどちらも１２～１８歳までの学校で、
ペンウェディングがウェールズ語系、ペングライスが英語系の学校です。
僕たちのホストファミリーはみんなペンウェディングの生徒です。

ペンウェディングでは、僕は化学と生物の授業を受け、学校のカフェでランチを食べました。
授業の仕方は日本とは全く違っていて、授業は選択したものだけ受けるので、基本的に少人数授業。
演技やダンスの授業もあると聞き、驚きました。
黒板が無い代わりに、パソコンの画面を前に映していました。
化学の授業では、一人ずつ小さいホワイトボードとマーカーが配られ、それをノートの代わりにして計算をしました。
日本人だとシャイな人が多く、授業で生徒の反応があまりなかったりしますが、この学校ではみんな間違いを恐れず自由に発言し質問していて、とても感心しました。

休み時間や自分の受ける授業がない時間は、広いホームルームのような部屋でみんなでトランプをしたり、お菓子を食べたり、話していたりとそれぞれ自由に過ごしていました。

←１つ年上のペンウェディングの人たち（17～18 歳）
ウェールズでは１７歳から車の免許が取れて、お酒も呑むことができます。
みんな自分の車の鍵を持っていました。
真ん中のエリスというイケメンはゴルフをしていて、タイガーウッズが彼のヒーローだそうで、僕の名前がタイガなので僕を気に入ってくれて話しかけてくれました。自分の名前のおかげで新しい人と関われて良かったです。

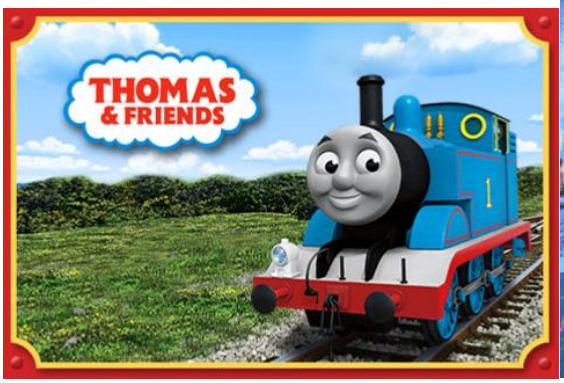
ペングライスは英語系の学校ということもあり、ウェールズ語を話せなくても大丈夫なので、いろいろな人種の人がいたという印象を受けました。
ペングライスに与謝野町が送った椿の木があったので見に行きました。
これからも枯れることなく千年椿くらいに大きく育ってほしいです。
ペングライスの人たちはペンウェディングの人たちよりも少し大人びているように見えました。

プライマリースクールは保育園と小学校が混ざったような学校です。
ここでも黒板ではなくパソコンの画面を映して授業をしていました。
みんな楽しそうに授業を受けて、休み時間には思いっきり遊んで、雰囲気は日本の保育園や小学校と同じ感じでした。

↓このベンチは一緒に遊ぶ人がいない時にここに座れば、誰かが来てくれて一緒に遊んでくれるとうものです。
発想がとても面白いと思いました。

プライマリースクールを見学した後、旧加悦町長がアベリスツイスと旧加悦町（与謝野町）の友好の印として贈呈した桜の木を見に行きました。
右の写真の文字は、上はウェールズ語、下は英語で表記されています。
ウェールズは公用語がこの２つなので、広告や駅の標識などほとんどがこの２言語で表記されていました。

訪れた場所



Vale of Rheidol railway という蒸気機関車に乗りました。
「きかんしゃトーマス」の元となった機関車があったそうです。
SL 広場のような感じで展示品がたくさんありましたが、実際に動く蒸気機関車は SL 広場にはないので、実際に動いている機関車に乗れてよかったです。

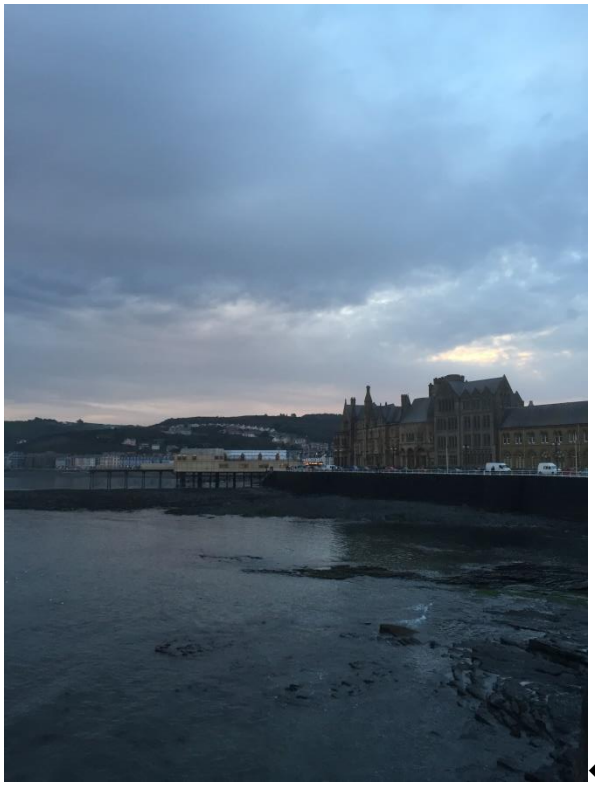
←Bere 城の跡地

このお城はウェールズとイングランド間の対立のなかで、ウェールズ軍がこの城を奪還され、焼かれたそうです。
日本の城は木造のものが多いので、昔の城がそのまま残っているということはあまりないと思いますが、こちらは石でできているので当時のままの城の跡が見ることができ、長い歴史を感じました。

国立図書館

アベリスツイスにはウェールズの国立図書館があります。
ウェールズで発行された新聞や本、ニュース、ウェールズ人が出ている映画などが全てここに一つは絶対に貯蔵してあるそうです。
フランクエヴァンズさんに関する資料もあり、見せていただけました。

アベリスツイス大学（旧校舎）



←右奥に見えるのが旧校舎

アベリスツイス大学を見学しました。アベリスツイス大学はイギリスでもかなり大きい大学だそうです。
大学の説明をインターナショナルスクールの人達と一緒に受けました。そのなかに日本人が二人いて、いろいろと話が聞けました。そのうちの一人から高校をやめてインターナショナルスクールに入ったと聞き、思い切って世界に進出

する人はとてもかっこいいと感じました。
与謝野町はこの大学のサマースクールに行ける制度があるので、必ず参加しようと思いました。

Marchynlleth Market

屋台が並んでいて、いろいろなものが売っていました。
ウェールズ語教室でウェールズ語を学んだり、ウェールズの歴史を聞かせていただいたりしました。イギリスの国のかたちでウェールズの部分がなぜ凹んでいるのかという事を聞きました。
ウェールズの海と陸をつなぐ門の扉の前に、門番がいて、その人が酔っ払って扉を開けてしまい、海の水がそこから流れ込んで、いまのイギリスの形になったと言われているそうです。

そこで現地のテレビ局の人から取材を受け、その様子がウェールズ中に放送されました。まさか海外のテレビに出れるなんて思ってもいなかったので驚きました。珍しい経験ができて嬉しかったです。

歓迎会

歓迎会では、僕と開智がダンスをしているので、みんなで日本のはっぴを着て、琴や三味線の音が入った音楽で踊り、そのあとに書道が得意なあきちゃんとまいちゃんが書道パフォーマンスをしてくれました。
日本の文化を混ぜて発表できて、見ている人も楽しんでくれたのでとても良かったです。　みんな漢字や、下敷きにした新聞に書いてある日本語に興味を持ってくれました。
書いてある漢字の意味などを教えてあげることができ、日本の言葉に触れてもらういい機会になりました。

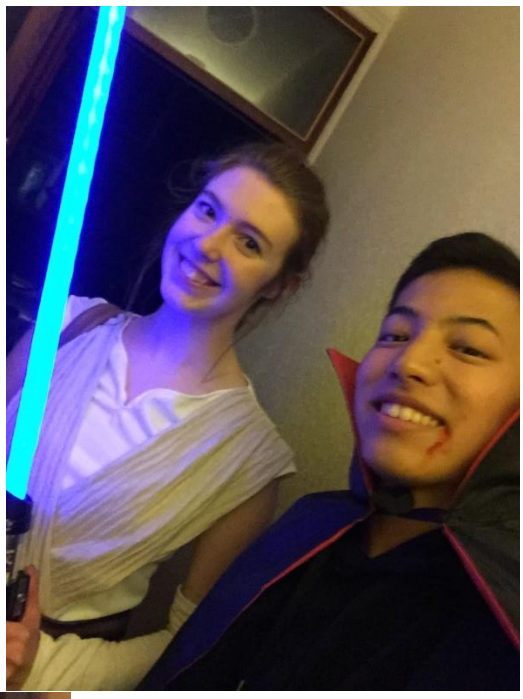
アベリスツイスの友達と

ショーンのおじいちゃんが経営している農場いろいろな動物がいました。牛、羊、犬、ヤギ、アヒルなどがいて、エサやりをしたり、トラクターに乗せてもらったりしました。
アベリスツイスには日本では見たことないような動物がたくさんいて見ていて楽しかったです。

森を歩いたり、街で買い物、カフェで休憩したり、サッカーの試合を見たり、映画館で映画を見たり、などいろんなことをしてみんなと過ごしました。

全て楽しかったですが、その中でも一番楽しかったのがハロウィンパーティです。

みんなで仮装をして、外に出てトリックオアトリートを言ってお菓子をもらいにいったりしました。全員で踊って、アナ雪の Let it go を歌い、最高の空間でした。仮装をしたのも初めてだったのでとても楽しめました。



・まとめ

自分が感じた文化の違い

・Yes と No がはっきりしていて、自己主張ができる
・路駐が OK で駐車場があまり無い
・ゴミ箱が街のいたるところに設置してある
・いただきます、ごちそうさま、がない
・食後には必ずデザートと紅茶が出る
・バスが前払い、前にしかドアがない
・買い物をした時にレジ袋をもらうのにお金がかかる

日本では当たり前のことでも、アベリスツイスでは当たり前でなく、いろんな場面で文化の違いを感じることができてよかったです。

最後に

この研修で、住む国、言語、宗教などの全く違う人たちとたくさん関わり、これからも世界が平和で有り続けてほしいと強く感じました。
両国が平和であるからこそ、僕たちがアベリスイスに行くことができ、交流が続いています。それでもほかの国では紛争や戦争が起こっているところもあり、この問題をどう考えていくかが僕たちの次の課題だと感じています。
事業に参加して、フランクエバンズさんの伝えたいことが理解できたような気がしました。
これからもアベリスツイスで体験したこと、思ったことなどをいろんな人に伝え続けたいと思います。
今回、この事業で、応援して背中を押してくれた家族、友達、先生、
派遣団長の渡辺さん、通訳の谷原さん、
アベリスツイスで出会ったたくさんの人たち、
そしてたくさんのことを一緒に学び、共有し、助け合った派遣団の６人
の　この事業で関わることのできた人たちとのつながりに感謝し、ずっと大事にしていきたいと思います。
文化交流だけでなく、それ以上のものも沢山学ぶことができました。
本当にありがとうございました！

ABERYSTWYTH 交流事業

宮津高校　2 年　柴田　和佳

【研修参加のきっかけ】

私がこの交流に参加する前、Aberystwyth 大学の学生 Abi をホストファミリーとして受け入れをしました。Abi に日本、与謝野の良さついて紹介するたびに、もっといろんな人に日本のよさを知ってもらいたい！Aberystwyth のことを聞きたい！と思うようになりました。昨年の夏に私はアメリカに短期留学する良い機会をあたえてもらったにも関わらずルームメイトの子に頼ってしまい有意義なものになりませんでした。受け入れで Abi の日本での生活に慣れようとする姿、初めて見る食べ物にも挑戦する姿に、はっとさせられました。現地でしか分からないものを知ることができることが留学の良い所だと気づかされました。高校生派遣事業があると知り参加を希望しました。私と同じく交流に参加したいけど一緒に行けなかった子がいて心が複雑でしたが、その子に「私の分も交流を楽しんできてね」と背中を押してもらい、部活のみんなや顧問の先生、各教科の先生方にも応援していただき自分にとっても与謝野町にとっても有意義な交流にしようと決心しました。

【現地での生活】

Host student の Cari[左]と Gwen[中]　よく家に行かせてもらった Efa[右]

ホストスチューデントがついてくれました。現地の法律ではホームステイは禁止されているので１０時まで一緒に過ごしていました。寝泊りは Aberystwyth 大学の寮でさせていただきました。

【食事について】

Fish and Chips

大学の食堂　朝ごはんはここで

晩御飯

出発する前にたくさんの方から料理が口に合わないかもしれないと言われましたが、まったくそんなことはありませんでした。定番のフィッシュアンドチップスはお酢や塩との相性抜群で日本で L サイズであろうかというほど山盛りの現地の S サイズを完食しました。また羊のお肉に初めて挑戦しましたが柔らかくてジューシーでとても美味しかったです。でも、チョコレートケーキだと思って食べた豚の血のソーセージは高校生の私には大人の味でした。

生活する中で、商品のパッケージに FAIRTRADE【フェアトレード】のマークがついているものをたくさん見かけました。フェアトレードとは、開発途上国の原料や製品を適正な価格で継続的に購入することにより、立場の弱い開発途上国の生産者や労働者の生活改善と自立を目指す「貿易のしくみ」を いいます。
【www.fairtrade-jp.org】 より。日本製品ではあまり見かけません。現地ではなるべくフェアトレードの商品を買うように心がけていました。日本でももっとたくさんフェアトレードのマークがついた商品が増えれば、より多くの人が発展途上国について関心を持てたり、社会貢献が出来たりすると考えました。

【現地での交流】

丘の上から

山を登って

カラフルな建物

ウェールズのハープ

教会

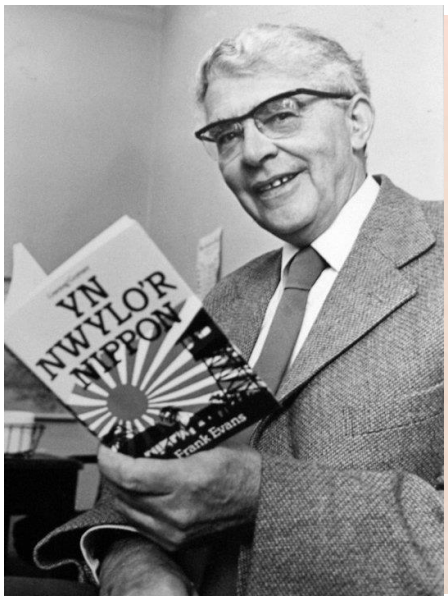
ハロウィン

ABERYSTWYTH は急な坂道が多く移動は大変ですが丘の上から街全体を見渡せる素敵な場所が多いです。Efa に教えてもらったお気に入りの散歩道は山の中にあり、曇りが多いこの地域では珍しく快晴で街並みを一望できました。建物の特徴として淡く色とりどりのものが多く見られました。なぜこのようにかわいいカラフルなペンキで塗られているのかというと似た形の建物が多いため見分けをつけやすくするためだそうです。

ウェールズの歴史博物館でウェールズ独特の三弦パープの演奏していただいたり、歴史について Allen さんにお話ししていただきました。ウェールズについてどの方も誇りを持っておられウェールズ愛を感じました。

フランク・エバンス氏の住んでおられた家の近くの教会に行き、神父さんのお話を聞いたり、賛美歌をウェールズ語で地域の方々と歌いました。今まで教会に行ったり、お祈りをしたことが無かったのでこれは私にとってとても貴重で自分の知らない宗教について知る良い機会となりました。

【フランク・エバンス氏について】



フランク・エバンス氏　Facebook 憎悪と和解の大江山　様より　　National Library で

第二次世界大戦で日本軍の捕虜となり、大江山ニッケル鉱山での労働のため旧加悦町に連れてこられ終戦まで強制労働を強いられたフランク・エバンス氏が 1984 年に抑留中に亡くなった僚友や平和の願いを込めて加悦町、日本冶金工業と協力し慰霊碑を建てたことから与謝野町(旧加悦町)と ABERYSTWYTH の関係が築いてこられました。今までこの友好関係が築かれてきたのはたくさんの両地域の人々の協力や悲惨な出来事を次の世代に伝え、二度とこの事実を繰り返さないためにもお互いのことを理解しあうことを大切にされてきたからだと思います。高校生交流団員の一員として、また日本人、与謝野町民としてこの交流を周りの人々に発信し一緒になって考えていくべきだと思いました。生まれる前だから関係ない、今の日本は違うとそっぽを向くのではなく過ちを真摯に受け止めこれから戦争のない世界のために出来事を忘れてはいけません。

【私たちがすべきこと】

私がこの交流を通して考えた私たちがすべきことは３つあります

１つ目はこの交流の背景について出来るだけ多くのひとに知ってもらうこと、下の世代に伝えることです。そのために研修のなかで学んだことを「研修どうだった？」と聞かれた際にきちんと伝えられるようにしたり、与謝野、ABERYSTWYTH のコミュニティ外にも広めていけるようにこれからも関心を持ち続けていきます。

２つ目はお互いの文化を尊重し合うことです。育った環境、文化、考え方が違う人に自分の文化、考え方を押し付けるのではなく相手の立場に立ち良い道を探すべきです。交流中に「苦手だったら無理しないでいってね」や「ここの文化は～が一般だけど無理に合わせることないよ」とたくさんの方に声をかけていただきました。事前に私たちとの文化の違いを理解していただいていたおかげで現地での生活に溶け込みやすかったと終わってから感じます。2020 年には東京オリンピックが開催されより多くの海外の人が日本を訪れます。日本のことを私たちが理解しておくのももちろんですが訪れる多国籍の人々の文化考え方を尊重したおもてなしをすべきです。これから私は異文化について調べたり、学校内だけでなく、異文化理解の催しなどがあれば積極的に参加していきたいです。

【最後に…】

与謝野町高校生代表として参加させていただいてとても光栄です。訪問は終わりましたがここで終わりではなくフランク・エバンス氏の平和のメッセージ、今後の交流の在り方をもっと自分なりに考え発信していこうと思います。そして、この関係を守っていくために自分ができることを見つけていきます。このような機会を与えてくださった与謝野町アベリスツイス友好協会の皆様、現地アベリスツイスで協力していただいた皆様、クラスメイトのみんな、先生方、部活のみんな、小谷さん、同行して下さった渡邉さん、谷原さん、そしていつも支えてくれた家族、協力していただいたすべての方に感謝しています。本当にありがとうございました。

アベリスツイス交流事業　報告書

加悦谷高校　2 年　松田開智

○参加したきっかけ

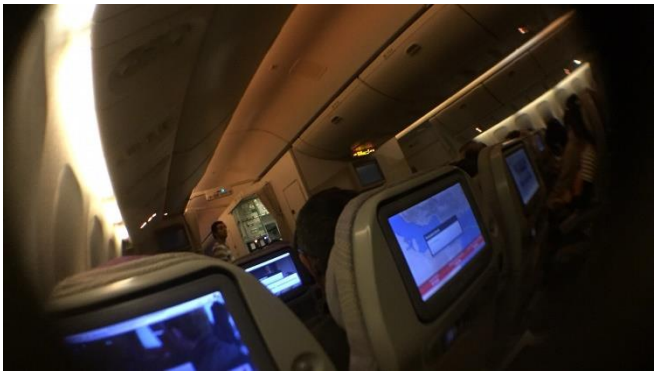
この交流の存在は僕が小学生の時から知っていました。当時僕はヨーロッパの文化や街並みの美しさに強い憧れをもっていました。そこで、高校生になってこの国際交流に実際に行って雰囲気などを直接感じて、この事業でしか経験できないことを思う存分体験しようと思いました。ただこの研修は観光では無いことはわかっています。自分のやるべきことをしっかりして与謝野町民の代表としての自覚をもち、与謝野町とアベリスツイスをつなぐ架け橋のような存在になろうと決心しました。

○交流事業日程　※時刻は現地時刻を表す

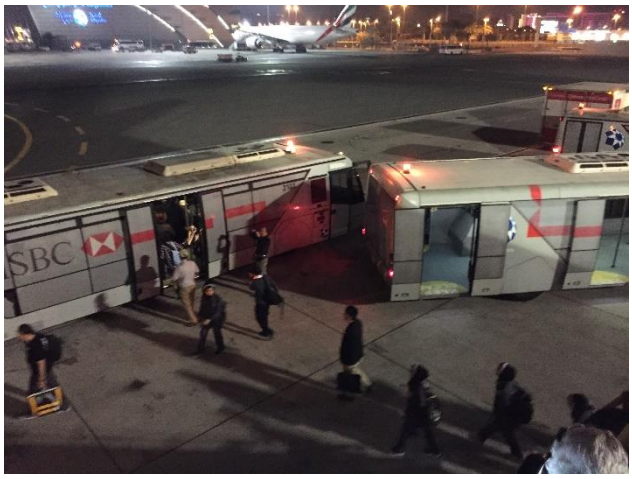
10 月 23 日	与謝野町発 関西空港着 関西空港発	18:00 頃 21:30 頃 23:40	町のマイクロバスで移動 EK317 便でバーミンガムへ(ドバイ乗継)
10 月 24 日	ドバイ空港着 ドバイ空港発 バーミンガム空港着 バーミンガム空港駅発 アベリスツイス駅着	4:50 7:35 12:20 14:09 17:17	着後、乗継(EK39 便) バーミンガムから列車でアベリスツイスへ 現地交流団のお出迎え バスで大学寮へ
10 月 25 日～ 11 月 1 日	アベリスツイス		アベリスツイスで国際交流活動
11 月 2 日	アベリスツイス駅発 バーミンガム空港駅着 バーミンガム空港発	7:30 10:50 13:30	ホストスチューデントたちのお見送り 列車でバーミンガムへ EK40 便でドバイ空港へ
11 月 3 日	ドバイ空港着 ドバイ空港発 関西空港着 関西空港発 与謝野町着	24:35 3:20 17:10 18:00 21:30	着後、乗継(EK316 便) 町のマイクロバスで与謝野町へ 与謝野町役場着　解散

○飛行機

今回の研修では世界最高のサービスと呼ばれるエミレーツ航空に乗りました。



映画も見放題で、出てくる料理もおいしかったです。関空からドバイ空港までの機内食には日本食もありましたが、ドバイ空港からバーミンガム空港までの機内食は海外の料理という感じでした。久しぶりの飛行機で興奮していて眠れなかったです。



ドバイ空港到着後の様子
SF 映画に出てきそうなバスがお出迎え

○ホストファミリーの紹介

僕のホストファミリーはアベリストウイスの町中からバスで15分ほど行ったところにあるエイミーの家でした。バスを降りてすぐのところにあり、玄関を開けるといつも猫が出迎えてくれました。近くにはパブがあってとても良いところでした。

Amy Miller（エイミー・ミラー）

いつも笑顔でやさしい、ロングヘアで背も高いスタイル抜群の女の子でした。僕より大人っぽくて背も高かったけど、同じ 16 歳と聞いてびっくりしました。映画をみるのが好きでいつもリビングで見ていました。音楽を聴くことも好きで Bruno Mars の曲をいつも聴いていました。昔、バレエを習っていて写真が飾ってありました。質問をしたらたくさん答えてくれてとてもうれしかったです。僕の最高のパートナーです。

ポール・ミラー

とても背が高くて体つきが良く、初対面の時は一瞬びっくりしました。しかし、一番家族の中で笑顔を見せてくれて、いつもニコッと笑ってくれるとても優しいお父さんでした。職業はわかりませんが仕事着を見る限り消防員かなと思いました。写真を撮る機会がなく残念でした。

ジョン・ミラー

彼女もとても背が高くて、びっくりしました。家に帰った時、いつも玄関で猫と一緒に迎えてくれました。僕が初めて家に行ったときは、ディナーに鮭や麺類などの日本らしいものを振舞ってくれてとてもうれしかったです。味も美味しく何回もおかわりしました。写真を撮る機会がなく残念でした。

○アベリスツイスの印象

バーミンガム駅から列車で 3 時間ほど揺られたところにアベリスツイスはあります。列車に乗って思ったことは車両がほとんど揺れないということです。日本の新幹線のようなスムーズな走りでとても快適でした。バーミンガムをでるとあたり一面みどりの丘でした。そして、一番印象に残ったのが羊の量がとても多いということです。あまりの羊の多さに圧倒され、さすが「羊のショーン」が生まれた国だなとおもいました。

アベリスツイスに到着して最初に思ったのが、「とても寒い!!」ということでした。寒すぎて毎日のティッシュの携帯は欠かせませんでした。ティッシュボックス 5 箱を全部使い切りました。日本よりも緯度が北にあり、風も吹いていてとても震えました。しかし町を歩いていると、稀に半袖姿で歩いている人もいてビックリしました。天気は快晴と呼べる日がとても少なくほぼ毎日曇り空でした。しかし雨天の日も少なく、滞在期間中に一度しか降りませんでした。アベリスツイスの人達は日本の人と違い、雨が降ってもほとんど傘を差している姿は見られませんでした。

とある１日のくもり空

街の中を歩いていて気付いたことがあります。それは人通りが多いということです。与謝野町より人口が少ないはずなのにとても賑わっていました。与謝野町では見かけない光景でとてもいい感じでした。特に駅周辺と海岸沿いの道の人は多かったです。街の中は道が狭く駐車スペースが少ないので車は不便なのかなと感じました。そして道に信号がほとんどなく交差点もロータリーがほとんどでした。そのため車に十分注意してから道を横断しないといけなく、いつも怖かったです。海岸沿いを歩いていたら、空に大量の鳥が飛んでいてビックリしました。大量の鳥が群れを成して飛ぶ姿は迫力満点でテレビでしか見たことない光景を生で見ることができてうれしかったです。

○食事について

タメダで食べた夕食

エイミーの家で食べた夕食

タメダでの朝食

ペンウェディングの昼食

食事は基本ナイフ、フォーク、スプーンで食べました。日本ではあまりナイフなどを使わないので食べるのも大変でした。日本ではイギリスの料理は美味しくないと言われています。しかし、食べてみると全然そうでもなくおいしいものもたくさんありました。基本的に野菜系が少なく味が薄いのが特徴です。とりわけ美味しいと思ったのがフィッシュアンドチップスです。土曜の夜にお店でテイクアウトして食べました。一番小さいものを頼んだけど出てきたのは結構多量で日本のＬサイズ並の大きさでした。食べきるのも一苦労でした。けど熱々でおいしかったです。

○町並みについて

町並みはとても美しく、色鮮やかで日本とは全く異なる雰囲気が出ていました。こんなところに住んでみたいなと思いました。街のほぼ中心にあるオールドカレッジはまるでハリーポッターに出てくるホグワーツのような感じで外観もとても美しく歴史を感じました。海岸沿いの道には世界中の国旗が掲げてありとても不思議でした。日の丸を見つけたときは興奮しました。

○学校の様子

アベリスツイスの学校はぼくが通っている加悦谷高校とは違って廊下が広く、壁や天井もカラフルです。教室が数え切れないほどあって全部見回りきれませんでした。この学校に通っている生徒には生徒専用の休憩ルームがあって、休み時間はそこでみんなでゲームをしたりして遊んでいました。加悦高にもつくって欲しいなと思いました。日本とは違って男女の仲がとても良くてハグしたりしている人もいました。日本では冷やかされたりするのでとてもいいなと思いました。授業は自分達のホームルームに先生がくるのではなく、生徒が先生のいる教室に移動するということになっており、休み時間の廊下は生徒達であふれかえります。いくつか授業を受けましたが、言葉が通じず理解できませんでした。

○フランクエバンス氏

今回の旅の最大の目的でもあるフランクエバンス氏の家とお墓に行ってきました。エバンス氏の家はアベリスツイスの街中から車でしばらく行ったところにあります。周囲はとても静かで落ち着いた様子でした。エバンス氏が戦争でつらいことを体験されたと思うととても悲しい気持ちでいっぱいになりました。エバンス氏のお墓も家の近くにありました。見晴らしの良い草原にたっており周囲には羊が沢山いました。この交流を始めてくださったエバンス氏には感謝でいっぱいです。いままでたくさんの方々が関わってこられたこの素晴らしい交流を、絶やさずこれからも続けられればいいなと思いました。

○さいごに

この与謝野町とアベリスツイスの交流のきっかけを作ってくださったエバンス氏。戦争で日本に連れてこられ、強制労働による過酷な日々を送っておられました。仲間も大勢亡くなられ、怒りと悲しみでいっぱいでエバンスさん自身も辛かったはずです。しかしエバンス氏は日本を許し、理解し、交流を深めようと努力されてきました。こうして今、２つの町が交流を続けられています。

今、世界中で戦争や紛争が起こっていて日々大切な命が失われています。この現状を変えることは簡単なことでは無いと思います。それでも誰でも好きで争っているわけではないはずです。お互い武器を降ろし、エバンス氏のように相手を許し、価値観を認め合い理解していくことが大切だとおもいます。そうすれば、多文化共生にもつながりいつの日か争いがなくなり平和な暮らしが訪れると信じています。自分は戦争を経験したことはありません。教科書やテレビから学ぶ戦争を知っているだけで本当の戦争の恐ろしさを知りませんでした。しかし、この交流を通して戦争について改めて深く考えさせられました。そして自分の考えを他国の人たちと共有し、新たな発見とも出会えました。自分にとって大変貴重な時間でした。

この交流は戦争によって生まれた、たいへん意味のある交流であり、たくさんの犠牲や、人と人との協力があって生まれたことを忘れてはなりません。そのことをみんなに伝え広めていくことがこの研修に参加した僕たちの使命であ

るとおもっています。
　この交流を通して、自分は少しでも変われた気がします。しかしいくら変わったとしても以前と同じようにしていては何も意味がありません。続けていくことで初めて変わるものだとおもっています。交流事業は終わりましたが、僕たちのやるべきことはまだ終わっていません。自分達が経験したことを後世まで語り継げるように頑張っていきます。

　最後になりましたが、この交流事業を通して支援して下さった方々、アベリスツイス友好協会の皆様、役場の皆様、そしていつも助けていただいた渡邉さん、谷原さん、5 人の団員達には感謝の気持ちでいっぱいです。これから先も両町の交流が続けられていくことを心の底から願っています。ありがとうございました。

アベリスツイス高校生派遣事業　報告書

峰山高等学校１年　堀江真衣

●研修に参加した目的や理由●

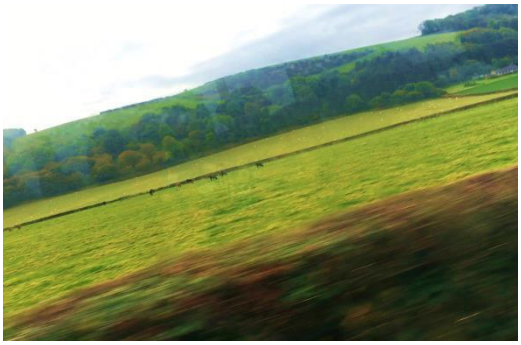
以前私の知っている人がこの事業に参加されているのを通信で知りました。そのとき、海外に興味を持っていたこともあり、この事業を通じて自分にできることがあるならぜひ参加したいと思い今回応募させていただきました
また、与謝野町とアベリスツイスをつなぐきっかけを作っていただいたフランクエバンス氏の思いを忘れることなく、この研修がお互いにとって良いものになるよう、一生懸命頑張ることに決めました。初めは知っている人が少なく、とても不安でしたが、与謝野町の代表として派遣して頂いていることを忘れないように励みました。

●アベリスツイスの町並みや景観●

(初めて見た印象)

田舎と聞いていたにも関わらず、すごくカラフルな町並みで映画に出てきそうな素敵な町でした。海岸沿いには特にカラフルな建物がたくさんあり、少し車を走らせると周りは羊だらけでとても面白かったです。

国立図書館からの眺めは最高で、アベリスツイスが一望できてよかったです。
歴史ある建物が多く、どこにいても歴史を感じられました。



●気候やサマータイム●

・晴れている日があまりなく、いつも雲がかかっているような感じがしました。
研修中の１０月、１１月は日本では秋でも、アベリスツイスでは日本でいう１２月のように朝からとても冷え込み、コートなしではとても寒さを感じました。
しかし、お昼になると少し暖かくなることもあり、気温の上がり下がりが激しく、服装にとても苦労しました。
研修中にはサマータイムの終了をはさみ、時間のずれが生じたので、睡眠時間などの時間感覚が分からなくなりましたが、これも貴重な体験ができてよかったです。

●食生活●

日本にいるとき、イギリス料理は、世界一美味しくないと聞いたことがあったので、正直不安でしたが、食べてみるととてもおいしく安心しました。
日本では毎日お米を食べるのと同じように、毎日ジャガイモを使った料理が出てきました。私のお気に入りはお酢のようなビネガー！

普段お箸を使って食べるので慣れないフォークとナイフはとても難しかったです。
向こうの人は、お箸にとても興味を持っておられて、挑戦してみたいと話されていました。
少し気になったことは、**食べ残しが多い**事です。
多めにとって食べられなかったら残すという光景が何度も見られました。全体的に**野菜が少なく**、薄味のものが多いように感じました。

●My host family●

Betsan(バットソン)

Betsan はとても優しく、動物が大好き！かわいいピアスをたくさん持っている。映画も大好き！

同い年なのに大人っぽい！！

Betsan はニューヨークに留学する予定があったので、2 日間だけしか一緒にいられなかったけど、とても親切にわかりやすく接してくれてとてもいい思い出が出来ました。
一緒に映画を見たり、クッキーを作ったり最高の思い出です。

Betsan の家はすごく大きな牧場を運営している。どこを見ても羊だらけ。パパもママも弟 2 人もたくさんはなしかけてくれてやさしかった！

弟二人とも写真を撮りたかったのですが、期間が短く撮ることができませんでした。

●訪れた場所●

国立図書館は、美術館のような感じでたくさんの資料が保管されていました。**酸素の量や、温度、湿度をその資料に合わせて調節**してあり、管理が大変そう。フランク氏の手帳なども保管されていて、より詳しく当時の様子を感じることが出来ました。

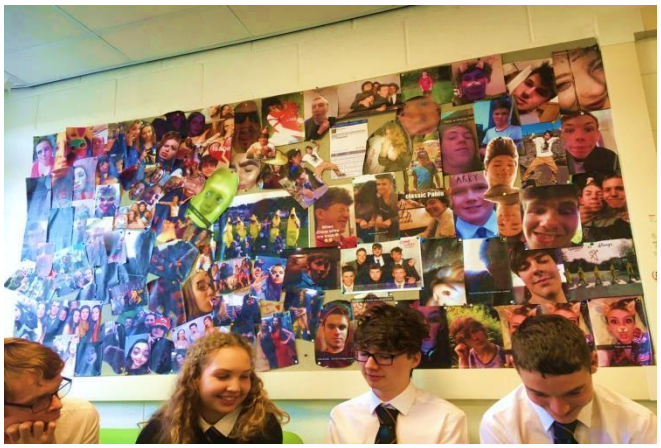
この研修の最大の目的であるフランクエバンス氏のお墓はとても広々とした、自然に囲まれた場所にありました。お花をお供えし追悼した時、なにか偉大なものを感じました。当時を想像すると、おもわず涙がこぼれそうになりました。
これからもこうして交流が続いていくことをフランクエバンス氏も望んでおられると思います。

平和の象徴

フランクエバンスさんが亡くなる前にすまれていた家の前にある教会にも行きました。
中におられたおばあちゃんたちにすごく歓迎していただき、とてもうれしかったです。
たってみんなで賛美歌を歌う際も、知らない曲だったのですが、わからないなりに歌いました。
オルガンの音色と私たちの歌声があったとき、何か神秘的なものを感じ、とても心地よく感じました。

●学校●

英語が主となる学校のペングライス高校や、ウェールズ語が主となるペンウェディング高校などを訪問しました。車で数分の距離にあり、言語が異なる学校は便利だと思いました。
それに、日本では毎日クラスメイトと同じ授業を受け、先生が変わるという仕組みが主ですが、これらの高校では講義を個々で選択し、別々に移動するというものでした。日本でも移動して受ける授業はありますが、このような講義単位で受講者がかわるのはとてもおもしろいと思います。
ほかにも、食堂などもあり、生徒たちが過ごしやすいような工夫がされていました。



壁に面白い写真が貼ってあります

●その他●

そのほかに思ったことは、買い物をしたときに配布される袋がイギリスでは有料だったり、交通機関などに遅れがあったり、バスの出入り口が一つしかなかったりする点では、日本のほうが便利だと思いました。
逆に、イギリスに走る二階建てバスからの眺めは最高で、日本にももっと走らせれば、景観がより楽しめると思います。
アベリスツイスの人はウェールズに住んでいることを誇りに思っておられて、アベリスツイスのことにとても詳しかったので、わたしも日本人であることを誇りに思い、日本のことを海外の人にたくさん教えてあげられるように頑張ろうと思います。

●研修を終えて●

参加するにあたり、初めはうまく馴染めるかどうかや、言葉の壁があり、とても不安でしたが、もう 2 度とすることができないような貴重な経験をさせていただきました。私は、後悔だけはしたくなかったので、勇気を出して話しかけるようにしていました。何事もチャレンジする気持ちや、心から伝える気持ちがあれば、相手に気持ちは伝わるし、心を持って接することが本当に大切だと思いました。

私は、この研修を通して“平和”や“幸せ”について強く考えることが出来ました。

かつては戦争があり、捕虜のような悲惨なことがありましたが、今こうして平和になり交流が続いているのは本当に素晴らしいことなんだ、と実感しました。

いつもこうして当たり前のように生活できていることが、当たり前でない事。

その当たり前となっていることがどれだけ幸せな事か、フランクエバンスさんをはじめこの交流にかかわっていただいた人から教えてもらった気がします。

留学を終えた後もずっと、アベリストウイスでできた友達と交流を続けていきたいです。そして、またいつか日本で会う機会があれば、日本を大好きになってもらえたらいいなと思います。

貴重な体験をさせていただきありがとうございました。

これからも末永く交流が続き、永久に平和が訪れますように。

アベリスツイス研修報告書

宮津高校１年　三田暁

この交換留学は本当に驚きの連続でした。楽しかったこと悩んだこと、たくさんありますが本当に充実した１２日間でした。

その中で私が特に感じたことは『文化・宗教の違い』です。イギリスはキリスト教を信仰していて、週に一度は必ず家族で教会に行き、牧師さんの話を聞きます。それが習慣として根付いています。それだけイギリス人というのは、自分はキリスト教だという自覚を持っています。一方日本では、主に仏教を信仰していますが、そんなに自分が仏教徒だという自覚が少ないような気がします。実際、私はお寺に住んでいながら、それほど自覚がありません。イスラム過激派のように宗教感が強すぎると過激な思想につながる可能性がありますが、逆に日本のように宗教が根付いていない国もどうかと疑問に思います。いま、世界で様々な宗教問題が起こっている中で、宗教感のちがいを肌で感じることができました。

次に、『食のこころ』についてです。他国の文化に触れることで自分の国を見つめ直すきっかけになります。その中で、改めて日本の良さを感じたことは「もったいない」というこころです。イギリス人は平気で食べ物を残したり、捨てたりします。日本人でもなかには、食べ物を残す人もいますが、やはり、私たちの中には「もったいない」というこころがあり、食べ物を残すことに躊躇したり罪悪感を抱いたりします。他国はそのような食文化の中で、日本人が持つ「もったいない」というこころはすごく価値があるし、とても大切なことだと実感しました。

最後に、この交換留学で私たち６人がアベリスツイスに行き、その国について学ぶだけでなく、向こうの高校生も日本や与謝野町について知りたいという気持ちが芽生えたことが一番の成果だと思います。私のホストスチューデントも来年与謝野町に行きたいと言ってくれています。『お互いを知る』ということは相手の国について知りたいと思うと同時に、自分の国のことを相手にも伝えたいという相互理解だと思います。伝えるためには、まず、自分の国や住む町について知らなければなりません。このことが、本当の意味での国際理解につながると思います。

将来は、この経験を通じてコミュニケーションの大切さを実感したので、語学を含めて大学でもっと深く国際関係について学んでいきたいと思います。また留学する機会があればいろんな国に行ってみたいし、その国について学ぶだけでなく、自分の国や住む町のこともしっかり伝えられるようになりたいです。

アベリスツイス研修報告

宮津高校１年　森本このみ

１　この研修に参加しようと思った理由

私には以前から「海外に行ってみたい」という夢がありました。 小さいときから憧れを持っていて、本当に「憧れ」といったようなものでした。

しかし、そんな私に海外へいくことが「目標」となったのは私が小学 5 年生の頃です。そのころ、この研修事業について知ったのです。そして自分なりにこの研修について調べていく中で「海外にいきたい」といった漠然とした目標ではなく、「この事業に参加したい」といった明確な目標となりました。

それはこの事業がただの海外旅行ではないから。私はまだ子供だったけれど、この事業に参加すれば、きっと自分の中で大きな成長を遂げることができるのではないか、そう感じていました。 この事業については、後ほど詳しく説明することとします。

今の私には見ることができない世界を、この研修は見せてくれるのではないか。そんな期待と、自分を変えてみせる！という情熱を私にくれました。

そんな、アベリスツイス研修事業に私は参加したい。その一心で参加に至りました。

２　アベリスツイスと与謝野町

ここではアベリスツイスと与謝野町が交流をはじめるきっかけを紹介します。

このように、フランクエバンス氏の平和への願い、そして希望を若い世代へ託し、よりよい世界、平和な世界を築き上げる。

そして、その意思を次の世代へ、またその次の世代へ繋ぐ。

こうしてこの事業はここまで続いてきました。

私たちもこの意志を引き継ぎ、守り、繋げていく必要があるのです。

第二次世界大戦中、フランクエバンス氏らが捕虜として「大江山ニッケル鉱山」で強制労働を強いられる。

↓

フランクエバンス氏が旧加悦町を訪問
町民の歓迎を受ける

↓

旧加悦町が慰霊碑を建立

↓

高校生派遣事業開始

３　アベリスツイスでの友達

レベッカ
明るくて元気な女の子　ダンスも上手！
とっても優しくて、一緒にいてとても楽しかった！
アベリスツイスに行って、初めてできた友達。
そして一番の友達です。

ダニエル
とっても紳士で優しい男の子
私の下手な英語も理解してくれて
たくさん会話できました！

エヴァ
かわいいものが大好きな
女の子。一緒にお買い物
をしました。

グレン
優しくてたくさんのことを
教えてくれました。

エイミー
大人っぽくてきれいな
女の子。とてもやさし
かったです　。

4　アベリスツイスで訪れた場所

私たちが泊まった、アベリスツイス大学の寮です。
ここでは、メンバーのみんなとしゃべったり遊んだり、交流を深めました。
今ではとっても仲のいい、かけがえのない大切な仲間、友達になれました。

　初めてアベリスツイスの友達と出会った日、バスに乗ってビーチに行きました。
みんなはとても優しくて気さくで、私たちを歓迎してくれました。

マーケットに行きました。たくさんのお店があって、お土産を買いました。
この写真は、そこにあった時計塔です。

アベリスツイスの海岸沿いの街並みです。
とてもカラフルな建物がたくさんあって、日本とは違うのだなと感じました。
ここの景色は今でも忘れられません。

旧加悦町が贈った、桜の木を訪れました。 改めて、私たちの町とアベリスツイスとの繋がりを感じる事ができました。

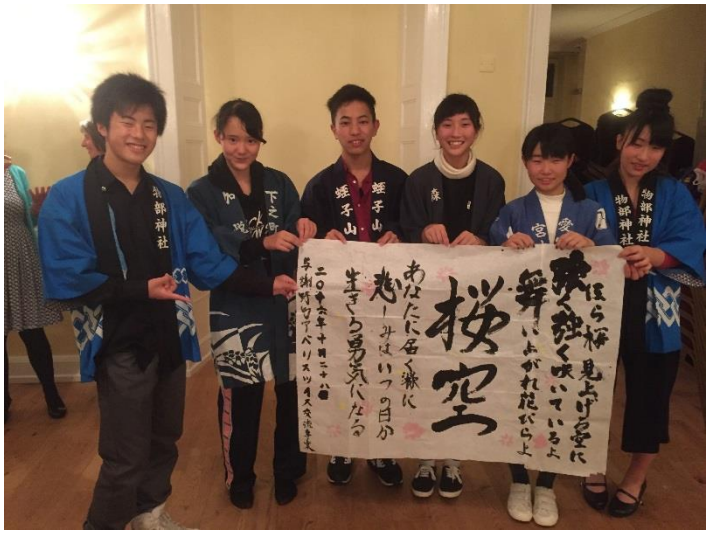
他にも、ウェールズの資料館に行きました。そこでは、ウェールズの歴史について学ぶことができました。たくさんの資料や展示物があり、多くのことを学ぶことができました。また、日本文化との違いも感じることができ、よりアベリスツイスという町に興味をもち、そして知識を得ることができました。

ウェールズの城跡も訪れました。昔のお城なので、今ではもう、崩れていますが、当時の様子や文化を感じることができました。

協会の方々、そして現地の友達のおかげで、とても有意義で、実のある研修の日々を送ることができました。 この海外研修で学んだことは、私にとってかけがえのない宝物となりました。

5　文化交流

先程も述べたように、現地ではたくさんの文化を感じ取ることができました。それだけではなく、日本の文化も共有しました。



これは、歓迎レセプションでの写真です。ここでは、ダンスと書道パフォーマンスを披露しました。

ダンスでは和楽器を使った曲を使用しました。

書道パフォーマンスでは、戦時中を生き抜いたフランクエバンス氏の意思を表したような詩を書きました。

現地の方々はとても喜んでくださって、私たちの友達は「日本に興味を持った」と、言ってくれました。

またホストファミリーへのお土産として、箸と折り紙を贈りました。

とてもよろこんでくださって、渡すとすぐに使ってみてくれました。

お互いの文化を共有し、とても有意義なものになりました。

６　平和について

　　私たちは光栄にも、フランクエバンス氏のお墓や、生前暮らしていた家を訪れる機会をいただきました。　事前研修でも学んではいましたが、ここに来て、目で見ることによって改めてフランクエバンス氏の意思を体感することができました。彼が私達に残したかったメッセージを素直に受け取りました。

　この地では言葉は通じませんし、見た目も違えば信仰も異なります。

　しかし、私たちは「友達」になることができたのです。

　人との繋がりでは、「違い」なんてものは、関係ないのです。

　そういったことを彼は私達に伝えたかったのだな、と私は考えています。

　この地でできた友達を失くしたくない。こう考えることが平和に繋がるのです。昔に戦争が起きたことは変えがたい事実であるし、無かったことにしてはいけません。むしろ伝えていくべきです。伝え、伝えられ、そうして繋げてきたのが、この「アベリスツイス研修事業」なのです。

7　さいごに

アベリスツイスへ旅立つ前、「きっと変われる」と言われました。

実際　本当に変わることができました。　今までは勉強も、そこそこ、がんばっていたけれど、今では明確な目標を持つことができました。

それは、より多くの「友達」をつくって「繋がり」をもつということです。

そのことはきっと「平和」に繋がってくれるからです。世界を意識して物事を見ることができるようになったのです。

そして、私は、この体験を多くの人に繋げていきたいです。そして、私のような人が増えればと思っています。

与謝野町とアベリスツイスの繋がりはこれからも守っていくべきなのです。今年で、アベリスツイス友好協会は 20 周年をむかえました。これから先何十年と繋げていくには、人々の「意思」が必要です。

この報告書を読んで少しでもこの「意思」を感じてくだされば幸いです。